木華黎王國下の探馬赤軍について

萩原淳平

まえがき
一　探馬赤軍の概念
二　探馬赤軍武將とその役割
三　探馬赤軍の編成と「諸部族」の解釋
四　世祖治下の探馬赤軍の再編成
五　探馬赤の語義・語源
むすび

まえがき

探馬赤軍はチンギス・カーンの時代から、世祖クビライが元朝を創立した後まで、東は中國地域から、西はイラン方面にかけて、長い期間・廣い地域にわたって活躍した軍である。史上まれにみるモンゴル族の活躍の下で、この探馬赤軍は、目覺しい活躍をしたことと、探馬赤の文字や音が特異であるところから、モンゴル史研究者は、必ずと言ってよい程、誰もが一應は關心をよせる課題である。從って、洋の東西を問わず、多くの著名な研究者が論著のなかや資料の譯註の一部などで、この問題に觸れてきた[1]。專ら探馬赤軍のみを對象とした研究としては、既に三十年以上も前に發表されたにも拘らず、優れた考察が多い、護雅夫氏の「探馬赤部族考序說」ほか一篇[2]は、私もしばしば本研究でその說を踏襲しながら、論を展開した程である。その後、海老澤哲雄[3]・楊志玖兩氏[4]がこの問題を取り扱った論文を發表した。

しかし、探馬赤軍は資料に曖昧な點もあり、難解を極める事もあって、解釋もそれぞれ異なるし、まだ充分に解明しつくされた定說もないようで、最近はかえって混亂をきたしているとすら思われる。私は、モンゴル史を研究する過程で、

探馬赤軍の本質を究めるには、その起源である中國で活躍した木華黎王國下の探馬赤軍の原點にかえり、その性格を明らかにする必要を感じ、檢討した結果、これまでの說と異なる結果をえたので、難解を承知の上で、私見を述べてみたいと思う。

一　探馬赤軍の概念

探馬赤軍について、最も詳細で且つ定義的に記しているのは、『元史』の「兵志」一の一文である。それによると、

若夫軍士、則初◎有蒙古軍・探馬赤軍。蒙古軍、皆國人。探馬赤軍、則諸部族也。其法、家有男子十五以上、七十以下、無衆寡、盡僉爲兵。十人爲一牌、設牌頭。上馬則備戰鬬、下馬則屯聚牧養。……。

◎既平中原、發民爲卒、是爲漢軍。……。

其繼◎得宋兵、號新附軍。……。

とある。ここに記された「探馬赤軍とは諸部族」なりの解釋が結局これまでの爭點になってきた。西方學者らの見解は、漢文資料とくに『元史』などを使用しないで、西方資料によって探馬赤軍は鎭守軍なりとする說が有力であり、その影響を受けたと思われる柯劭忞氏の如きは、その著『新元史』の「兵志」一では、『元史』を否定し、前揭『元史』の資料に對應する個所で、

蒙古起朔方、兵制簡易、部衆自十五歲以上七十歲以下盡僉爲兵。非其部族者、謂之探馬赤軍。

と述べ、完全に反對の立場をとった。これに對して、護雅夫氏は、「探馬赤部族考序說」および「元初に於ける探馬赤部族について」で、探馬赤軍は諸部族なりと云う『元史』の立場から、諸部族の解明にあたり、論證のすえ、

探馬赤軍とは、蒙古軍とは別に、單一の部族よりなる投下＝功臣の軍、例えばジャライル・イキレスなどの誇り高き部族の軍である。

とした。これに對して、海老澤氏は、「元朝探馬赤軍研究序説」のなかで、護氏の説を否定しつつ、西方學者の説をも引用して、探馬赤軍は鎮守軍なりの説を肯定し、そのうえ、『元史』の斷片的な資料を分析して、結論として、『元史』の「探馬赤軍は諸部族なり」は、誤った記述として、『新元史』説の立場をとった。

しかし、『元史』はモンゴル史研究の基本的資料であって、それを否定するばかりでなく、全く相反する結論を出すのは、どうであろうか。成る程、『元史』は短時日の間に編纂され、誤りの多いことは、これまでの研究で明らかにされている。しかし、前に掲げた文は、「兵志」の冒頭に掲げられた部分であって、言わば總論とも言うべき個所で、編纂者としては最も苦心を拂い、重要視した部分である。それを斷片的な部分、むしろこの部分にこそ誤り、ないし不充分な個所が多いと思われる資料で、反對の立場を立證することは、方法論的に言って誤っているのではなかろうか。

私は、『元史』を主な資料とする限り護氏の立場こそ正しいと思う。從って、私も「探馬赤軍とは諸部族なり」という立場をとる。ただし、結論から先に言えば、諸部族の解釋では、護氏とはかなり異なる。

そこで、順序として、私は「諸部族」の解明のための條件を追求してみよう。

まず、先に掲げた根本資料によれば、モンゴル帝國の軍士はその成立について時代的に「初」以下と、「既」以下と、「繼」以下の三期に分けられる。すなわち、第二期の中原平定の時期の漢軍、第三期の南宋を平定した時期のもと南宋軍である新附軍より以前に、蒙古軍・探馬赤軍は成立していた。モンゴルの國初成立と言うことになる。

次に、探馬赤軍は制度的な意味では、男子は十五才以上七十才以下の者はすべて兵となるとか、上馬すれば、戰鬪に備え、下馬すれば、屯聚牧養するなどに關する限り、蒙古軍と全く同一のように記されていて、遊牧騎馬軍團の樣相を呈していることを知る。

さて、先きに掲げた「兵志」一の文章につづいては、

又有遼東之乞軍・契丹軍・女直軍・高麗軍・雲南之寸白軍・福建之畲軍、則不出戍他方者、蓋鄉兵也

とあり、モンゴル軍に協力し、モンゴルの外國遠征に功績をあげ、しかも人種的、社會生活的にモンゴル人に非常に近い契丹軍などは言い方によれば、（契丹）部族軍ともいえる。しかし、ここに明示してあるように、探馬赤軍は契丹軍とも明白に異なることを知る。

「兵志」一では更に、

又有以技名者、曰砲軍・弩軍・水手軍。

とあり、探馬赤軍はこれら特殊技能を持った軍とも異なることを知る。また更に、

應募而集者、曰答剌罕軍。

とも記され、探馬赤軍は募兵軍でないことも明らかである。

以上は、多少具體性には缺けるが、概念的總論的に探馬赤軍とは如何なる軍であるか、その基本は定義づけられたと言える。そしてこの部分に關する限り、蒙古軍と探馬赤軍は略同一の性格を持っているとしか言えない。『元史』のなかの斷片的な資料、例えば、同じく「兵志」二の鎮戍の項には、

至元二十一年十月、增兵鎮守金齒國、以其地民戸剛狠、舊嘗以漢軍・新附軍三千人戍守。今再調探馬赤蒙古軍二千人、令藥剌海率赴之。

と記されている。しかるに、本紀卷十三では、

至元二十一年十月戊申、四川行省言、金齒遺民、尚多未附。以要剌海將探馬赤軍二千人討之。

とあり、事件としては、全く同一のことを取扱いながら、「兵志」二では探馬赤蒙古軍と記し、「本紀」では單に探馬赤軍と記されている。これを何れか誤りとするか、別の解釋を加えるか、種々の考え方はあろう。しかし、周知のように、『元史』ではモンゴル關係について同一人名や同一地名が幾通りかの漢字音で示されている。例えば、世祖とアリクブカとの戰爭が行なわれた昔木土腦兒の地名は十一ヶ所に記錄されるが、朱門禿など九通りの漢字化がなされている。これ

は、この戦いに關する記録が恐らく九人以上の人々によって記され、それがそのまま編纂されたので、編纂者が統一見解をだして、それに基づいて編纂しなおしたものではない。單に地名や人名の漢字化のみならず、一つの事件についても、それを記した人によって表現や評價は異なる。探馬赤蒙古軍に關しても、「兵志」一で蒙古軍と探馬赤軍は明らかに區別されているとしても、他の個所では、この基準で記録されているとは限らない。『元史』の記録のうち、特にモンゴルについてはある一つの價値基準で全體を機械的に判斷することこそ危險である。私は先にかかげた探馬赤蒙古軍と探馬赤軍は同一のことを記したもので、前者はより詳細に述べたので、結局、蒙古軍と探馬赤軍は時に、あるいは取扱う人によって同一視される程、似ているということを述べておく。斷片的な例としては、このような類例は、外にも幾つか擧げることができよう。

二　探馬赤軍武將とその役割

これまで見てきたように、蒙古軍と探馬赤軍とは、紛らわしい程類似點が多い。にもかかわらず、「兵志」一では、明らかに蒙古軍と探馬赤軍は區別して記されている。ではその相違點は何かと言うことが問題になる。「兵志」一では、その相違點が、單に蒙古軍は國人、探馬赤軍は諸部族であると記されているだけである。結局は、この國人と諸部族の定義を明らかにすれば、探馬赤軍は解明できるのであるが、その表現があまりに漠然としていてこの文だけでは直接の手掛りは得られない。

そこで、これらを明らかにするために、『元史』中の斷片的ではあるが具體的な事例を分析してみよう。

まず、「兵志」二によれば、

國初木華黎奉太祖命、收札剌兒・兀魯・忙兀・納海四投下、以按察兒・孛羅・笑乃觧・不里海拔都兒・闊闊不花、領探馬赤軍。既平金、隨處鎮守。

とあり、探馬赤軍は、國初に木華黎のもとに五部に編成されたことを知る。ただし國初と言っても明らかではない。チンギス・カーン親ら金國遠征を行ない、のち金朝が南遷し、一二一七年に木華黎が國王に任ぜられ、チンギス・カーンから、

太行之北、朕自經略。太行以南、卿其勉之。

と、敕を賜い、かつ、チンギス・カーンは親ら所在を示す九斿大旗を木華黎に與え、諸將に、

木華黎建此旗以出號令、如朕親臨也。

と諭し、更に、

乃建行省于雲燕、以圖中原。

とあるように、木華黎國王に中原經營を一任した。この時、木華國王軍が編成されたが、その內容は、

分弘吉剌・亦乞烈思・兀魯兀・忙兀等十軍、及吾也而契丹・蕃漢等軍、並屬麾下。

であった。[5] 探馬赤軍は、この後、間もなく、この木華黎國王軍の中で編成されたものと考えられる。

さて、その活躍の様子は、五部將のうち三人に關して『元史』に傳があるので、それによって知ることができる。そのうち、重要な部分を紹介しよう。

按札兒（『元史』卷一二二）の場合は、木華黎國王軍の前鋒となって各地を轉戰し功績をあげたが、己卯の年一二一九年、木華黎が遠征して、河中府を下して、北方に引きかえした時、木華黎は按札兒に所部の兵を統率して、平陽に駐屯し、金軍に備えさせ、しばらくの間、國王事を攝せしめたと言うから木華黎の信任が厚かった。當時國威の回復をはかって、しばしばモンゴル勢力に反抗してきた金將乞石烈氏も按札兒の威名をおそれて、敢て輕々しくは其の境を犯さなかったという。その後、按札兒の威名をとどろかせたのは、河中府の攻防戰である。

一二二二年、國王に任ぜられてから既に五年ほぼ河北を平定した木華黎は、この年八月に秦鞏地方攻略を計劃した。木華黎傳によると、

八月、隱士喬靜眞曰、今觀天象、未可征進。木華黎曰、主上命我平定中原。今河北雖平、而河南・秦鞏未下。若因天象而不進兵、天下何時而定耶。且違君命、得爲忠乎。

とある。この問答は、まさに木華黎の人となりを示し、面目躍如たるものがあり、木華黎は固い決心で黄河を渡り陝西に入ろうとした。結局、この遠征は木華黎最後の遠征になり、歸途彼は病死する。ところで、この遠征は、黄河が南下して、ほぼ直角に東流する、その折點の河中府を通ることにしていた。當時河中府は金軍の掌握するところであったが、木華黎軍の進擊で降服した。ここは戰略的には最も重要な地であるため、木華黎は、

蒲爲河東要害、我擇守者、非君不可。

と言って、石天應を指名し、彼をとりあえず河東南北路・陝右關西行臺に任命して守らせた。石天應は黄河に浮梁を作って、軍を渡した。そして木華黎本軍は鳳翔めざして進軍した。これを見て、金軍の侯七（侯小叔）は十萬の軍をひきいて、河中府の石天應を攻擊してきた。この戰鬪は、當時としては餘程有名であったらしく、『金史』の宣宗本紀（下）や侯小叔傳、『元史』では、木華黎傳・石天應傳などにも多少異なった記述はあるが詳しく記されている。結局この戰いで石天應は戰死して、河中府は金軍の占據するところとなった。この事態は、遠行路上の戰略的要地を失うというモンゴル騎馬軍團の遠征にとって最も憂慮すべき結果となった。黄河にかけられた浮梁は燒かれ、木華黎軍は歸るに歸られない狀態に追い込まれた。

そこで、河中府に近い平陽に駐していた按札兒は急遽要害の河中府奪回をはかったが、この戰いで、按札兒は「斬首數十萬級」、金軍の「逃免者僅十數」と云う大戰果をあげ、浮梁を再び作って、無事木華黎を迎えることができた。ただ木華黎は、黄河を渡って、間もなく聞喜縣で病沒した。按札兒は、木華黎の長子第二代國王孛魯につかえ、のち太宗の金國遠征の際には、鈞州三峯山の戰いで、金將完顏合達の十五萬の軍と戰い、大きな戰果をおさめた。

最後に、按札兒は金の滅亡後、平陽戶六百一十有四、驅戶三十、獵戶四を賜わり、平陽に鎭守したが、平陽・太原地域

を管轄した。

闊闊不花、（『元史』巻一二三）の場合は、

闊闊不花爲五部前鋒都元帥、所向莫能支。

とあって、木華黎國王の前鋒として大いに活躍したことは按札兒と同じであるが、五部前鋒都元帥とあるところを見ると、五部將のうちでも代表格であろうか、彼は濱・棣諸州から益都方面で活躍した。ただ彼は按札兒と性格的には異なっていたように見える。先の文につづいて、「然不嗜殺、惟欲以威信懷附。故所至無殘破。」とあって、當時のモンゴル部將としては、異色の存在ともいえよう。その最も顯著な例は、太宗の金國遠征の折、彼は淮水を渡り壽州を攻めた時の事で、

守將無降意、射書城中諭之。城中人感泣、以綵輿奉金公主開門送款。闊闊不花下令軍中輒入城虜掠者死。城中帖然。

と記している。一般には、特に西方では、チンギス・カーン軍は無謀な大量虐殺をしたと非難されているが、先の河中府の場合のように、騎馬軍團は、補給路を含め、交通路の中斷を最も恐れるので、將來の不安を除くため、戰略的に言っても定着民族に對しては理解を越えた行動があった。しかし、定着社會に持續的に支配を行なうようになってからは、同じモンゴル族でも次第に變ってきた。すでに木華黎自身、史天澤らのしばしばの助言によって受動的ではあったが、その晩年には、殺戮を思い止まった事實が指摘されている。從って、太宗時代に入って、闊闊不花が積極的に反抗者に降服をすすめたとしても、不思議はない。それにしても、闊闊不花のこの行動は、一般的に見れば、まだこの時期としては特筆すべき傾向と言えよう。

最後に、

歳丙申、太宗命五部將分鎮中原、闊闊不花鎮益都・濟南。按察兒鎮平陽・太原。孛羅鎮眞定。肖乃台鎮大名。怯烈台鎮東平。括其民匠、得七十二萬戸、以三千戸賜五部將。闊闊不花得分戸六百。立官治其賦、得薦置長吏、歳從官給其所得五戸絲、以疾卒官。

とあり、また、「食貨志」三には、

闊闊不花先鋒、五戸絲、任子年元査益都等處疇零二百七十五戸。

とあるように、闊闊不花は益都に六百戸を下賜され、益都・濟南を管轄區域として、鎮守するようになった。のち壬子（一二五二、憲宗二）年には逃亡戸などあって、二百七十五戸に減少したが、なお存續していたことを知る。

笑乃觧は、傳としては同音別字で「肖乃台」（『元史』巻一二〇）に記されているが、彼の場合は、始め同じように木華黎麾下の先鋒軍であったが、一二二五年、一旦降服した金將武遷（仙）が木華黎死後、モンゴル支配が弱體となった一二二五年に眞定で叛亂をおこした。この叛亂は、チンギス・カーンの中國侵入以來、元朝確定期までの間、最も活躍した史天澤を頂點とする史氏一族にかかった隨一の悲劇として喧傳された事件でもあり、肖乃台傳はもとより、太祖本紀・史天倪傳・史天澤傳や『金史』の武仙傳などに詳しい。要約すると、史天倪・史天澤らの父であり、史氏一門の長老の史秉直は既に一二一三年彼のもとに集った民衆をひきいて遠く北方に行った。殘った彼の妻を、子の史天澤が北方に送りとどけに旅していた間に、武遷が反亂をおこした。これより先、木華黎國王軍の進出で眞定が平定されると、木華黎は史天倪を河北西路兵馬都元帥・行府事に任じ、降服した武遷を、天倪の副として治安にあたらせた。この二人はまた對照的な人物で、天倪は眞面目人間、武遷は策謀家野心家であった。史天澤の旅行出發で手薄になったのを見て、武遷は、天倪を酒宴に誘った。これが策謀であることは天倪も探知していたが、眞面目人間の天倪はあえて出向いて謀殺された。

この事件を知って史天澤は歸還を早め、武遷討伐をはかったが、その際木華黎にモンゴル軍の援助を要請した。この要請に答えて、木華黎は笑乃觧を派遣した。笑乃觧はこの時精甲三千を率いて、史天澤軍と合して嚴しい戰鬪の後、武遷を追い拂い眞定を回復した。この時、

將士怒民之反復、驅萬人出、將屠之。肖乃台曰、金氏慕國威信、傒我來蘇、此民爲賊所驅脅、有何罪焉。若不勝一朝之忿、非惟自屈其力、且堅他城不降之心。乃皆釋之。

とあるように、笑乃觧は最初の功績を眞定で、史天澤と協力してあげ、しかも彼は單に軍事力を發揮したばかりでなく、民政をも考慮した施策を施した。

笑乃觧はその後、太原を下し、太行を略し、また歸附と反逆を繰り返した宋將彭義斌をも破って、彼を殺して止めをさした。その後も轉戰し、特に東平平定には大きな功績をあげた。また太宗の金國遠征にも、史天澤と協力して蔡州をかこみ、血戰連日、事實上、金朝に最後の止めを刺した。

なお、笑乃觧は金朝滅亡後、

賜東平戶三百、俾食其賦、命嚴實爲治第宅。分撥牧馬草地。日膳供二羊及衣糧等。以老病卒于東平。歸葬漠北。

とあるように、東平に食邑三百戶を下賜され、ここに鎭守して生涯を終えたとみられる。

このほか、探馬赤部將と記される人物は、幾人か存在した。[6] しかし、その多くは明確でない。ただ、これまでにも擧げた五部將の一人である孛羅についてだけは述べなければならない。

護氏によると、この孛羅は木華黎の長子孛魯であろうと述べている。[7] この說は、すでに那珂通世氏の『成吉思汗實錄』卷一二の探馬臣の割註でも、「孛羅は木華黎の子の孛魯なるべし」と述べている。嚴密に言えば、孛羅と孛魯の音は異なっているので、別人として取扱うべきであるが、『元史』のモンゴル人名の音譯漢字化では、例えば孛羅海拔都と孛魯海拔都とは同一人物であることが明らかにされているように、一般的に見ても、この程度の音譯の多樣性は多く認められる。從ってこの點だけでは、孛羅と孛魯は同一人か別人かは判定できない。しかし孛羅は、功績をあげた後、金の滅亡後は五部將で三千戶が分與されており、平均一人六百戶が與えられた。「食貨志」三には、

孛羅先鋒　五戶絲・丙申年分撥廣平種田一百戶

とあり、多少數字は異なるが同一人物である。これに對して、孛魯は木華黎の長子で、國王位を繼承した第二代の國王である。木華黎は木華黎家を代表して實に、三萬九千一十九戶を分與されている程で、功臣としての格が全く異なる。それ

ばかりでなく、木華黎家の孛魯は、第二代の國王になりながら僅か三十二才の若さで一二二八年（太祖二十三）に死亡した。他方五部將の孛羅は金の滅亡（一二三四）の後、丙申（一二三六）年に眞定の鎭守軍の長として配置されたところを見ると、孛魯とは全く別人であることは明らかである。そして、護氏はこの孛魯からジャライル探馬赤軍、更にジャライルと同格のイキレス・オンギラート探馬赤軍などと所謂功臣名族探馬赤軍へと展開していくが、私の結論とは、この孛羅の解釋あたりから兩極端へと分かれていく。その點については後に述べるとして、私としては、確證のえられる前記の傳のある三人から論を進めていこう。

さて、闊闊不花・按察兒・笑乃觧の探馬赤軍三部將の概略から言えることは、いずれも初めは木華黎國王軍の先鋒であったこと、またいずれも輝しい功績をあげたこと、そしてその功績をあげた場所のうちで、後に鎭守軍として止ったことである。

このうち、先鋒軍について見ると、モンゴル軍の一般論から言えば、先鋒軍は社會階層的に言えば最下層の人々が受け持つのが原則である。重要な戰爭などの例外は別として、軍事力の優劣によって先鋒が決定されるのではない。軍事力が弱體だからと言って豫備軍とか後方にまわしてくれはしない。弱ければ全滅する。逆に全力をだして敵に勝ち、降服者を得れば、その降服者が次の機會に先鋒軍となる。前の先鋒軍は一段格が上って第二陣にまわる。このようにして、戰爭を繰り返し、勝利を收めれば、次々に社會的階層も一段づつ高くなる。このような事情から先鋒軍は全力を擧げて戰うのでモンゴル軍は益々強力になった。モンゴル社會は階層分化でなく階層累加によって巨大になっていった。相對的に早くチンギス・カーン政權に參加した部族程、社會的地位は向上した。その頂點に立つチンギス・カーンおよびその一家の、權威もそれに應じて次第に高まったと言えよう。從って探馬赤軍が先鋒をしていた間は、當時のチンギス・カーンおよびその後繼者の政權の最下層にいたと見るべきである。

次に探馬赤軍が鎭守の職務を負わされたことについて述べよう。元來モンゴル軍は騎馬軍團で、鎭守することはなかっ

た。チンギス・カーンは金國遠征にあたっても、初年度の小規模遠征では速不台の力で居庸關を拔いた。しかし翌年の本格的な遠征の時には、居庸關は金軍の堅い防衛にあって、チンギス・カーン本軍は居庸關をさけ迂回しなければならなかった。居庸關附近は、兩側をそそりたつ山にはばまれ、溪谷をなし、人馬の往來は、川の岸の僅かな地を利用しないわけにはいかない。この地を見れば、一見して所謂天險の地であることは明瞭である。從って、再度の金國遠征をはかっていたチンギス・カーンは普通ならば、戰略的に見て、必ず居庸關を確保しておかなければならない。そのためには守備のための駐屯軍を置いておくべきであった。しかし、モンゴル騎馬軍團には駐屯軍を置くことは當時としては、考え及ばなかったのであろう。金軍の防衛強化策にあって、苦心させられた。

同じようなことは、チンギス・カーンの金國大遠征後にも言えるので、一二一七年木華黎が國王に任ぜられ、中原の經營を委ねられた後の木華黎の行動は、探馬赤軍を先鋒として、殆んどが、チンギス・カーン金國遠征時の遠征區域の再確保に費された。それは、チンギス・カーンの金國遠征が嵐のように過ぎ去った後に彼はモンゴル軍の駐屯軍を置かなかった爲に、木華黎が再遠征しなければならなかったのである。

このような事情を知ってであろう、木華黎は在世中、先に述べたように按札兒を臨時的にもせよ、既に平陽に駐屯させた。按札兒の駐屯は、木華黎本軍の勢力削減に結びつくが、その犧牲を拂っても、駐屯の意義は大きかったと解される。

金が滅亡し、丙申年にモンゴル王侯功臣に七十數萬戸の分撥が行なわれ、モンゴルの河北支配が強固になると共に、政治的軍事的經濟的な重要地の平陽・太原・眞定・益都・東平に固定的永續的な鎭守軍の配置の必要に應じて、探馬赤軍に鎭守軍としての役が割り當てられたのである。

しかし、遊牧騎馬軍は活潑な移動に誇りを持っていたし、定着を蔑視し、拒絕した。それ故にこそ、『元朝祕史』で最後の太宗の四大功績の一つに、この困難な事態を克服して、探馬赤軍を鎭守させたことに、意義を誇示したのである。逆に言えば、この遊牧騎馬軍の拒絕反應の對象である鎭守の役割を擔わされたのは、モンゴル社會內での最下層にある探馬

赤軍に、割り當てられたと考えるべきである。

探馬赤軍の社會的身分の低さ、惡さを示すと思われる資料は外にもある。

「兵志」一の兵制に、

中統三年三月、詔眞定・彰德・邢州・洺磁・東平・大名・平陽・太原・衞輝・懷孟等路各處、有舊屬按札兒・孛羅・笑乃觧・闊闊不花・不里合拔都兒等官所管探馬赤軍人、乙卯歲籍爲民戶、亦有僉充軍者、若壬寅・甲寅兩次僉定軍已入籍冊者、令隨各萬戶依舊出征。其或未嘗爲軍、及蒙古漢人民戶內作數者、悉僉爲軍。

とある。同じことを述べた資料の石高山傳には、

高山奏曰、在昔太祖皇帝所集按察兒・孛羅・窟里台・孛羅海拔都・闊闊不花五部探馬赤軍、金亡之後、散居牧地、多有入民籍者。

とある。一般的に言えば、中國に侵入し、既に金朝を滅亡させた蒙古軍ならば、指揮官階級はもとより、最下級の軍士でも、彼らは特權階級、支配階級の底邊を形成していたとみなければならない。しかるに、探馬赤軍はたとえ最下層階級であったとしても、先に述べた樣に大活躍をし、大いにモンゴル帝國のために貢獻したのである。それが、金滅亡後、一部は鎭守軍として止ったが、そのほかに、牧地に散居し、民籍に編入された者が多かったと言う。功績に對する恩賞が民籍編入とすれば、功績前すなわち探馬赤軍成立時は、社會的にみて、民籍にも入らない階級、例えば、隸屬民階級に屬していたと見なければならない。

のちのことで、至元九年七月の二つの資料は、それを暗示する。

至元九年七月乙酉、詔分閱大都京兆等處探馬赤奴戶名籍。（世祖本紀）

至元九年七月、閱大都京兆等處探馬赤戶名籍。（兵志三）

この兩記事は、全く同じことを記したと見るべきである。前者は探馬赤奴戶とあり、後者は單に探馬赤戶である。何れか

が誤りと言う解釈も成立しようが、私は両方とも正しい、ただ前者は詳しく述べただけであると考える。すなわち、探馬赤は本來奴戸であって、モンゴル人およびモンゴル社會に精通した人ならば探馬赤戸だけで、殊更奴をつけ加える必要はない。しかし、事情を知らないか、漠然と知っている漢人には、探馬赤戸だけでは何を意味するか判明しないので、探馬赤と言われる奴戸と説明的に詳しく述べたと考えられる。あたかも、先に述べた探馬赤軍と探馬赤蒙古軍との場合と同じである。なお、『元典章』にも、しばしば探馬赤軍驅とか探馬赤驅口などとあり、探馬赤は本來、奴とか驅に屬していた。その一部が、この時代まで殘っていたのであろう。

三　探馬赤軍の編成と「諸部族」の解釋

これまで見てきたように、探馬赤軍は、果してきた役割、その後の待遇、また斷片的な身分を示す表現で、元來は隸屬的身分の階級に屬すると言う解釋が成り立ちうることを知ったが、このことは、他の面からもうかがえる。それは探馬赤軍の出自に關してである。

「兵志」一の總說の所で、探馬赤軍は諸部族なり、とあることを述べたが、部族とすると、探馬赤部將、すなわちその指揮官はその部族内では族長ないし族長に準ずる人物とみなされる。探馬赤軍部將は最少五人、累計すれば十數人を數えるが、その出自の明確なのは、先に述べた傳のある三人である。笑乃觧は禿伯怯烈氏、闊闊不花は按攤脫脫里氏、按札兒は拓跋氏である。

闊闊不花の出身である按攤脫脫里氏とは、モンゴル語で記せば、Altan Tatar 氏、すなわち黄金のタタール氏、タタール族のうち最も重要な正統派に屬する氏族である。このタタールは大部族であるとともにチンギス・カーンにとっては父祖以來の仇敵であった。古くは、アンバガイが謀略にあって殺される時、

五つの指の爪をはがすまで、十の指先をすりへらすまで、わが讎をば果たしおおせよ。[8]

と遺言したことや、エスゲイ・バートルがタタール部の一部のテムジンを捕え、おびただしい獲物をえて歸った時に生れたのがテムジン、後のチンギス・カーンである。そののち、テムジン九才のとき、父エスゲイはわが子の嫁をさがしにでかけ、歸途タタール部民に毒殺され、このためにテムジン一家は苦境に立たされた、などのことは、『元朝祕史』の詳しく傳えるところで、よく知られた事實である。チンギス・カーン家にとって、この古く且怨みの深いタタールに對し、成長したチンギス・カーンは、一度はケレイト部の王罕と協力して、攻擊し、その一部を擊破したが、結局一二〇二年になって、はじめてこの強敵を完全に破ることができた。その様子は、『元朝祕史』では、

タタール族をかように根絶やしに虜にしてしまったのち、その國民をどう處置したものかと、チンギス・カーンは大評定を親族のもので、ひとつ小舍に入って評定し合った。評定した結果いい合わすよう、

「むかしからタタール族は、わが父祖たちをばいくたびとなく殺めてきたものであったぞ。この父祖たちの仇うち返し、怨晴らして、車輛の轂(こしき)に比べて、その高さまで生い伸びたる男の子らはみな殺しに殺してくれんぞ。一人殘らぬまでにみな殺ししようぞ。あまれるものは、われらがともども奴婢にしようぞ。[9]」

と記している。またドーソンの『蒙古史』では、

テムジンは一人たりとも助命してはならぬと嚴命した。それにも拘らず、テムジンの妻妾でタタール出身であった二人、さらにテムジンの將士の妻となっていた多くのタタール婦女はいずれもタタールの幼兒をひそかに助けることに成功した。またテムジンの弟のジュウチカサルは捕虜の分配に際して、千人を受けとって、それを虐殺することになっていたが、タタールの生れであるその妻の哀願に動かされて、その半數のみを虐殺して、ほかの五百人を隱匿した。後にテムジンは、この不服從の行爲を知って激怒の極に達した。そのほかに逃走して、殺戮を免れたタタール族もいくらかいた。それ故この部族は全滅したのではなかった。タタール族でチンギス・カーンの子孫に仕えた者には將校も部隊もあったことはよく知られている。[10]

と記している。これらのことから、タタール族は、チンギス・カーン軍に殲滅的打撃を受けたが、それでも幼兒や婦女は「奴婢」として諸王や戰爭に參加して功績をあげたジャライル・モングート・ウルートなどの諸功臣に賜與されたことを知る。

次に、笑乃台は禿伯怯烈氏出身である。怯烈は Kereit すなわちケレイト。禿伯はモンゴル語の Tüb すなわち中央とか中心、正統とか嫡流などの意味で、これまたケレイト嫡流派出身である。このケレイト族は、當時最強を誇り、一時はその族長のワンカンはチンギス・カーンと盟約を結んでいたが、ジャムカの陰謀に迷わされて、終にチンギス・カーンと戰うことになった。この戰鬪は激烈をきわめたが、終にチンギス・カーンの勝利に歸し、彼はモンゴリアを統一して一二〇六年大クリルタイを開きカーンに推戴された。これらのことも『元朝祕史』に詳しく記されているところであるが、戰爭終結期の樣子を同書によって紹介すると、

かようにケレイト部族を降服させて、それぞれ、みんなでその妻子家財部民らを分け合って己がものとさせた。（中略）ケレイト部族を悉く虜えて、誰にも不足なきまで、たっぷり分ち與えた。萬のトベゲン族を散らし合って、その數の盡き果てるまでみんな取り合ったし、多くのドンガイド族も丸一日もかからず取り收めさせてしまったぞ。血まみれの武具を奪い取るというなる、かのジルギン族の勇士どもも、細かく引き裂き分けて、ふたたび彼らが集い合うことのできぬまでにしたぞ。かように、かつての偉大なるケレイト部族をば、かく亡ぼし盡くして、その冬、チンギス・カーンはアブジア・コデゲリの地に冬籠りしたのであった。[11]

とあって、ケレイト族も潰滅した。ただ、ここでも、一部の幼兒や婦女は隷民として功臣らに分かち與えられた。

なお、タタールといいケレイトといっても、この頃のチンギス・カーンがすでにモンゴル主流のボルジギン氏族を中心に、傍系のウルート・モングートやジャライルなどの氏族集團を含む政治集團であったように、ケレイト集團の中には、前記引用文中にも一部を示したように、トベゲン族やドンガイド族・ジルギン族などを含む政治集團であった。それ故、

タタールやケレイトの潰滅は同時に、その中に含まれるトベゲン族のような小集團も解體された。次に、按札兒は拓跋氏出身とある。拓跋氏については明らかにしえない。ただこれまでの研究によると、禿別延・禿別干と記され[12]、前記のトベゲン族と見ることもできよう。何れにしてもケレイト集團内の小部族の如きものではなかろうか。

このように見てくると、探馬赤とは、本來チンギス・カーン軍に潰滅させられたタタールやケレイトなどの部族のうち、殘存しチンギス・カーンの諸王家や諸功臣たちに分配隸屬させられた人々に關係があるように思われる。再び石高山傳に注目してみよう。

在昔太祖皇帝所集按察兒・孛羅・窟里台・孛羅海拔都・闊闊不花五部探馬赤軍。

とあり、探馬赤軍は軍の編成にあたって、各處に散在していた人々を「集め」て成立した軍であって、本來から氏族を中心として血緣關係によって結ばれた部族のように團結していたものではなかった。これを更に具體的に述べたのが「兵志」二の資料である。すなわち、再び記せば、

國初木華黎奉太祖命、收札剌兒・兀魯・忙兀・納海四投下、以按察兒・孛羅・笑乃觧・不里海拔都兒・闊闊不花五人、領探馬赤軍。

とある。石高山傳の敍述と同じように、太祖チンギス・カーンの命令で探馬赤軍の編成が行なわれたので、木華黎國王にもその權限はなかった重要な行事であった。その集め方は、札剌兒以下の四投下に限定して「集め」「收め」る方法が取られた。ここで問題になるのは「四投下」[13]の投下の意味である。投下に關しては、これまでにも種々な說があって、モンゴル遊牧領主或は領主の采邑、時には采邑を構成する領民をさす言葉などで、定說はないと言うよりは、投下も探馬赤軍と同じように、時代により記錄した人によって意味が異なると考えられる。この場合は、領民が最も適當であろう。しかし、札剌兒といえば、その基幹構成員は、木華黎を主長とするジャライル氏族集團である。彼らはチンギス・カーンのモンゴリア統一でも重要な役割を果たしたばかりでなく、木華黎が國王に任ぜられ中原經營を委任された段階では、その中

心的な存在であり、最下層の一軍士といえども最も誇り高い地位をしめていたと思われる。ただし、ここでは木華黎は國王であり、最高責任者で、輩下の全部隊の總指揮官であって、ジャライル軍集團は木華黎の弟の帶孫の指揮下として、木華黎王國軍の重要な一翼を擔って活躍した。木華黎は丙申年分撥の折、三萬九千一十九戸の分撥を受けた功臣で、臣下として超高級に屬し、チンギス・カーン諸子の四萬戸以上に次いで高かった。帶孫は一萬戸、兀魯・忙兀も、この帶孫級である。これらの氏族集團の領民が、戰功に對する恩賞として平均僅か五百戸の分撥しか與えられなかった採馬赤軍武將、しかもその出自がタタール・ケレイトなどチンギス・カーン國家では正式には存在を否定されていた氏族出身の武將の輩下に分屬され、先鋒となるということはありえない。彼らは、それぞれ、ジャライル軍團、ウルート軍團、モングート軍團などに直屬していた。

従って、この四投下とは、ジャライル部族集團とかウルート部族集團では、政治的社會的に存在を認められていない隷屬民、それも舊のタタール・ケレイトなどの出身の人々を指したものであろう。

この四投下所屬の隷屬民を「集め」「收め」て、これを舊部族ごとに五部[14]に「分けて」採馬赤軍を編成したのである。

〔太祖命太師木華黎伐金。分採馬赤爲五部（闕闕不花傳）〕このような方法は、この時が初めではない。チンギス・カーンが一二〇六年卽位した時、あるいはその以前においても行なわれた。例えばチンギス・カーンは一二〇六年卽位時に恩賞を行なったが、その時、バヤウト出身のオングルは、

「恩賞を撰ばせ給うとあらば、バヤウトの氏人は異國（部落）異國（部落）ごとに分かれ、散じておりまする。恩賞を賜わるとあらば、まずバヤウトの氏人をわれに纏めさせ給え」

と申し上げると、

「よろしい。しからば、バヤウトの氏人を集め纏めて、卿みずから統めよ、その千戸を」

と御沙汰があった。[15]

また、トオリルの場合も、

トオリルの申し上ぐるよう、

「恩賞され給うとあらば、わがネグスの氏人は部落部落ごとにわかれ、散じておりまする。恩賞を給うとあらば、まずネグスの氏人をわれに集めさせ給え」

というたところ、チンギス・カーンは聖旨を下されて、

「しからば、ネグスの氏人を纏めて、卿の子子孫孫にいたるまで統べておるべし」

との御諚があった。[16]

これらの例でみるように、氏族が解體分割された場合、その舊構成員は、誰れもが再構成を最も強く望み、時にそれが許されて、實現した。この再構成は、氏族の團結を強固にし、大きな力を發揮する。彼らが先鋒にあてられると強力な軍隊になった。

ただ、このような部族編成には、短所あるいは危險もあった。タタールやケレイト族はかつて潰滅的打擊を受けた。編成當時は潰滅時から約二十年を經過し、當時殺されることを免れた幼兒も成人したが、彼らが舊部族單位に集められれば、舊部族意識を復活し、ひとたび誤れば、反旗をひるがえす恐れは大いにありうる。從って、簡單に再編成を認めることは危險である。木華黎と五部將の信頼關係、更に五部將の部下として集められる探馬赤軍の軍士とも、強い信頼關係がなければ、容易に認められなかったであろう。恐らく、木華黎は、探馬赤軍の編成の規模とか構成員の一員まで愼重に檢討を加えたうえで、チンギス・カーンの許可をえて、最終的にはチンギス・カーンの命令という形で探馬赤軍の編成が行なわれたと思われる。

探馬赤軍の五部將は、タタールやケレイトなどの出身であるが、何かの理由で、早くチンギス・カーンのもとに從屬し、すでに個人的に戰功を立てていたことが知られており、笑乃觧にいたって特に木華黎麾下で活躍したいことを積極的

にチンギス・カーンに申しでて許されたように、木華黎と五部將とは強い信頼關係に結ばれ、木華黎もまた、彼らにより功績のあがる機會を與えるとともに、先鋒として、活躍することを期待したと考えられる。そして、その後のモンゴル帝國の發展とともに探馬赤軍も期待通り、活躍したのである。

ただ、先に述べたジャライルなどの部族軍と探馬赤軍との異なる點は、一二〇六年あたりを境としての位置づけである。一二〇六年に、チンギス・カーンはモンゴリアを名實共に統一し、自らはカーン位に卽き、政治・軍事體制として、八十八功臣を九十五の千戸の千戸長に任命するなど、モンゴル國家體制を完成した。この時點で、既に國家創立に貢獻し、國家の構成員と認められたものは「國人」で、その中には言うまでもなく、ジャライル・ウルート・モングート集團なども含まれる。逆に、廣義のモンゴル系種族に含まれている者でも、國家の構成員とは認められない私的な隷屬民は國人の範疇に入らない。この隷屬民を集めて舊部族毎に編成してできた探馬赤軍は、特殊部族軍と言える。最初にかかげた『元史』「兵志」一の蒙古軍・探馬赤軍の定義的敍述である、

若夫軍士、則初有蒙古軍・探馬赤。蒙古軍、皆國人。探馬赤軍則諸部族也。

は、これまで述べてきた事情を最も簡潔に表現した言葉である。從って、探馬赤とは、モンゴル國成立後、モンゴル內部における、政治的軍事的、特に社會的な身分を示す特殊用語であって、彼らが活躍した中原の一般漢人らにとっては、一見しただけでは、人種的にも社會生活のうえでもモンゴル系に屬しているから蒙古軍と探馬赤軍とは區別する基準が判然としなかった。それがために、斷片的資料に見るように、往々にして、蒙古軍と探馬赤軍とを混同した表現が用いられたとしても、それを責めるわけにはいかない。

四　世祖治下の探馬赤軍の再編成

さて、探馬赤軍は木華黎が國王に任ぜられ中原を經營するにあたって、編成され、國王軍の先鋒として活躍したが、木

華黎が死に第二代の孛魯が死に、三代の塔思の時、太宗によって金國遠征が行なわれた。この頃から王國の存在價値は否定され、中原經營はモンゴル中央が掌握するようになり、金滅亡後は、耶律楚材の建議などもあったが、丙申年の戶口の分撥など政策的に大轉換が行なわれた。これにともなって、探馬赤軍は解體され、一部は鎭守軍として、河北の重要地點に定着したが、一部は、牧地に散居して、民籍に入るものも多かった。

この事情が改められ、再び探馬赤軍が編成されたのは、世祖の中統三年であった。石高山傳によれば、

中統三年、高山因平章塔察入見世祖奏曰、在昔太祖皇帝所集按察兒・孛羅・窟里台・孛羅海拔都・闊闊不花五部探馬赤軍、金亡之後、散居牧地、多有入民籍。國家土宇未一、宜加招集、以備驅策。帝大悅曰、聞卿此言、猶寐而覺、卽命與諸路同招集之。旣籍其數、仍命高山、佩銀符領之。

とある。中統三年といえば、世祖が卽位して三年、中國においては李璮の反亂などがあり、中國經營に多忙を極めると同時に、モンゴリアにあっては、優勢ではあったが、まだ阿里不哥と對立していた。世祖にとっては最も多難な時代であった。その要求に應えての石高山の上奏に、世祖も大いに悅び、探馬赤軍の再編をはかったのであろう。石高山は忽魯虎の子、父はチンギス・カーンの侍衞軍として中原遠征に功績のあったモンゴル人で、後に德興府に定着した。石高山はモンゴル族出身で中原の情勢に明るい所から上奏し、探馬赤軍の總指揮官にあてられた。この時集まった探馬赤軍は當然さきの解體前の形態をできるだけ踏襲した。

例えば、五部將の一人笑乃觧は、すでに死亡していたが、その子の兀魯台は、

中統三年、從石高山奉旨、拘集探馬赤軍、授本軍千戶。

とあるのは、[17] その良い例であろう。石高山は管軍總管を授けられ、息州に鎭したが、軍令嚴肅で、「寇不敢窺居」とある。「百官志」五によれば、

中統三年、以世祖五投下探馬赤、立總管府、秩四品、總管一員、

とある。ここでは、單に總管府とあるが、「兵志」二では、

中統三年、世祖以五投下探馬赤、立蒙古探馬赤總管府。

とあり、「兵志」の方が詳細である。なお「兵志」ではこれに續いて、

至元十六年、罷其軍、各於本投下應役。

とあり、また探馬赤軍が解體された。この間の事情については明らかにし得ないが、石高山傳によると、彼は伯顏に從って南宋遠征に參加し、功績をあげたが、歸還後、自ら北征し、至元十六年に和林に戍したとあるから、この時、中國經營につとめた探馬赤軍と別れ、探馬赤軍の存在理由もなくなって解體したのではなかろうか。それにしても解體された探馬赤は、本投下すなわち、そのもと所屬していた札剌兒・兀魯など四投下に再び歸屬して應役したと解される。木華黎が四投下から集めて編成した探馬赤軍が約六十年後、再びもとの投下に歸ったものであろう。

しかし、至元十九年には、また、編成され、二十一年には、樞密院の奏によって、

以五投下探馬赤軍、屬之東宮、復置官屬如舊。

とあり、東宮所屬となったが、二十一年には、

改蒙古衞侍衞親軍指揮使司

となり、功績によって職務は益々重要になっていった。

以上が、探馬赤軍の成立から元朝初期に至るまでの概略であるが、次に、探馬赤の語源についても觸れてみよう。

五　探馬赤の語義・語源

探馬赤の語源は探馬赤軍の解釋が種々にわたっていたと同樣に、まだ定說はない。例えば、

おそらく、漢語の探馬が語源であって、それがモンゴル人に傳えられ、「……する人」を意味する接尾辭 ci が附され、

あるいはそのままで使われ、ただ意味がやや變化したのでないだろうか。

という説[18]は、本末を轉倒した説で論外として、一般にモンゴル語の Tama と či の合成語であることは知られている。či は人をさすことは明らかである。Tama がモンゴル語の何に當るか。私の調べたところでは、Tama は「集める」という意味がある。探馬赤軍の成立にあたって、「集め」「收め」ることが最初の行動であったことを先に述べたが、それと考え合せると、「集められた人」と解しても誤りではないように思われる。

しかし、これまでの説で Tamaγa（印）＋či 説がある。音のうえから言えば、γa の音は明確には發音されなかったか、少くとも中國人には聞きとりが容易でなかった。例えば、Baγatur（勇者又は人名）は拔都兒・覇都魯などに漢字化された。從って Tamaγa či も探馬赤と漢字化されたと見ることができる。それならば、Tamaγa（印）は何を意味するかと言えば、解釋は必しも一つではない。文書に印を記したところから、掌印官という解釋もある。印の諸説のなかで、私が最も有力と考えるのは岩村忍氏の説である。それによると、

探馬赤とは、語源的にはモンゴル語で印を意味する Tamaγa から由來したものであろう。遊牧民の間では、自分の家畜を他から區別するためにウマに烙印を押し、ヒツジの毛の一部を顔料で染める習慣がある。探馬赤は Tamaγači であることは確である。ただ漢字の字面として、探馬を當てたのは、たまたま當時精鋭な先鋒、偵察隊などを中國語で探馬（水滸傳）と呼んでいたので、音の類似を藉りて探馬と譯したものと思われる。[19]

と述べている。この場合、Tamaγa が Tanma（探馬）に譯されたのは、音譯に多少意譯を含めた漢字化と言へよう。この家畜に押す Tamaγa については、モンゴル人民共和國科學アカデミーのモンゴル古代中世史學者スフ・バートル氏が、具體的に○◎□△など百二十五種の例をあげ、使用器具の圖まで付して發表されたし、[20]また一九七六年九月にウランバートルで開催された第三回國際モンゴル學者會議では、同アカデミーの考古歴史學者のペルレー氏が、同じように具體例を圖示しつつ詳しい研究を發表された。[21]言うまでもなく、これらの烙印は、家畜の所有主が所有權を明らかにし、他の

所有主の家畜との混亂をさけ、盗難を防ぐことが主たる目的で、遊牧社會では古くから行なわれてきた習慣である。

この岩村氏の説にしても、タムガが探馬赤軍は諸部族なりという『元史』「兵志」の説と關聯づけて研究されたことはなかった。しかし、私がこれまで論證してきたように、探馬赤軍は本來「奴」のような隷屬民であるとすれば、家畜の印と類似のことが行なわれた可能性がでてきた。ただ印と言っても、どのような印かは明らかにしえない。たとえ全く同一としても、いくつかの條件とか基準があったのではなかろうか。例えば、戰爭による捕虜といっても、チンギス・カーンの戰爭は、詳細に檢討すると、その目的とか方法によって、性格は相當異なっていた。彼がモンゴリアを統一してカーン位に卽くまでの戰爭でも大別して二種ある。その一つは、政治集團特にその指導者の單に優劣を爭う戰爭である。この種の戰爭では、先鋒など一部では烈しい戰鬪も行なわれたが、全體としては、むしろ戰鬪は最小に止めた。この間に、戰爭の計劃や準備、指揮能力、戰後の戰利品の分配、死傷者に對する處置など、指導者の集團の長としての適格性が試驗される。その結果如何では、敵も降って、積極的な協力者になり、第三者の立場にある集團も、その事情を知って協力者になる。チンギス・カーンの戰爭を見ると、殺戮はできるだけ避け、自軍の損害を少くすると共に、敵をも協力者にする全人的魅力が彼にはあった。それ故にこそ、チンギス・カーン集團は短時日の間に急激に巨大集團になりえた。

しかし、例外もあった。タタールとケレイト集團である。彼らは、たびたび卑劣な方法で、チンギス・カーンを欺き、痛烈な損害を與えた。それ故、彼が兩集團と最後の戰爭に臨むときには、もはや單に優劣を決するのではなく、どちらかが根絶するまで徹底的に戰った。先に述べた『元朝祕史』などの記錄が、その樣子を物語っている。それにも拘らず、捕えられ死罪を免れて生存を認められた者があったとすれば、奴として牛馬のように領主たちに所有印をおされたとしても當然といえよう。探馬赤軍は、それらの印のおされている探馬赤からえらび集められ軍として編成されたと解される。

他方、探馬赤を狹義に解することもできる。探馬赤軍はある特定の軍事行動のために、隷屬民が、領主の直接管轄から離れて、編成されるので、目的が達成されれば、その軍は解體され、その構成員は再び、舊領主に歸屬する。その際の混

亂をさけるため、また、その間に功績をあげたり、事故や戰傷病死の場合に、種々の問題が領主に關係する所から、よせ集めの混成部隊員に領主印を押したとも考えられる。木華黎軍團の場合だけを考えれば狹義に解される。狹義か廣義かは今後の研究にゆずるとして、探馬赤軍は少くとも領主の印が押されていたことは確かであろう。

むすび

これまで述べてきたように、探馬赤軍とは、本來チンギス・カーンに潰滅させられたタタール・ケレイトなどの部族の殘存者が賜與として領主級の人々に分ち與えられた私的な隷屬民のうち、木華黎國王軍が編成された折、ジャライル・ウルートなどの四領主配下から集められ、舊部族毎に五部に再編成された軍を言う。その構成員には、領主の印がおされていた所から探馬赤軍と呼ばれた。

その身分は、初めこそ隷屬民であったが、その能力功績によって次第に高く用いられるようになった。特に探馬赤軍が編成されたのは、モンゴル帝國の急激な發展期に當っていたから、その變化も大きかった。

探馬赤軍を單に先鋒軍とか、或いは鎭守軍とか侍衛親軍などに規定した在來の說は、探馬赤軍がただその時々に擔った任務・職掌の一端を述べたもので、探馬赤軍の本質に觸れたものではない。

また、探馬赤軍は「非其部族者」なりとする『新元史』の說[22]は、諸部族の眞意を理解しない說であり、ジャライル・ウルートなど誇り高き部族軍とする說[23]は、「蒙古軍は國人」なりの國人を等閑に付し、諸部族を擴大解釋したための說である。ただ私としては、中國における探馬赤軍の起源の研究に重點をおいたため、元朝中期以後の探馬赤の變化や、西方の探馬赤には觸れえなかったが、今後更にこの方面の研究を進めるつもりである。

註

① 我が國の主な說としては、那珂通世『成吉思汗實錄』鎭守說。　箭内亙『蒙古史研究』鎭守說。白鳥庫吉「東胡民族考」扈從

説。その外、安部健夫氏、岩村忍氏の説をはじめ、諸種の譯註類に含まれる説を加えると、かなりの數にのぼる。

中國の主な説としては、趙翼『二十二史劄記』の「蒙古官名」では矯捷の兵説、屠寄『蒙兀兒史記』朮赤傳では、謫戍の軍官説、何劭忞『新元史』の「兵志」では、部族にあらざる者説など。

ヨーロッパの學者の説としては、バルトリドの鎮守または達魯花赤に準ずる官 B. B. Бартольд, Сочимения. т. I, *Туркестан в эпоху монгольского нашествия.* ペーニッシュは知事説、B. Haenisch *Wörterbuch zu Monghol um Niuca Tobca'an*, ペリオ 前衛軍説 P. Pelliot, *Neuf notes sur des questions d'Asie centrale*, T'oung Pao 26. この外指揮官説など。

② 護雅夫「探馬赤部族考序説」(『史學雜誌』五五編一號)、同 「元初に於ける探馬赤部族について」(『北亞細亞學報』三輯)。

③ 海老澤哲雄「元朝探馬赤軍研究序説」(『史流』七)。

④ 楊志玖「元代的探馬赤軍」(『中華文史論叢』第六輯)。

⑤ 木華黎王國軍については、『親征錄』『ラシード』などに、より詳細に述べているが、ここでは直接には必要がないので、『元史』の「木華黎」傳の内容を示すに止めておいた。

⑥ 『秋澗先生大全文集』卷八一「中堂事記」中統二年六月二日の記事の中に、阿朮魯拔都兒、塔四火魯赤など十三名の探馬赤武將の姓名が記されている。護氏は前記二論文で、それぞれの部族名、種族名を檢討しているが、タタール、ケレイト以外は不明の者が多い。楊志玖氏も、この記錄について觸れている。詳しくはこの三論文を參照されたい。

⑦ 護雅夫前掲論文。護氏は孛羅を『元史』「木華黎」傳の孛魯にあてた。

⑧ 『元朝祕史』村上正二譯『モンゴル祕史』一卷六七頁。

⑨ 村上正二譯『モンゴル祕史』二卷五一頁。

⑩ 佐口透譯『モンゴル帝國史』一卷八二頁。

⑪ 村上正二譯『モンゴル祕史』二卷二一九頁。

⑫ 同 二卷三三五頁註三。

⑬ 四投下のうち、札剌兒・兀魯・忙兀は明らかであるが、納海については、これまでの研究者も觸れているように明確にしえない。強いて、さがせば、ジャライル部木華黎の從兄弟搠阿の子に那海がある。(村上『モンゴル祕史』二卷三三五九頁參照)外の三投下が氏族名であるのに比し、那海は個人名である。ただし、那海の時に、新たにジャライル部から獨立して、別に集團を構成したとも考えられるが、詳細は不明である。

⑭ この五部は、五部探馬赤軍・五翼探馬赤軍と記されるもので、所謂五投下(『元史』一二〇朮赤台の兀魯兀台・忙兀・札剌兒・弘吉剌・亦乞列思)とは直接には關係ないと見るべきである。

⑮ 村上正二譯『モンゴル祕史』三卷一五頁。

⑯ 同三卷二九頁。

⑰ 『元史』卷一二〇 肖乃台傳

⑱ 海老澤哲雄「元朝探馬赤研究序説」。

⑲ 岩村忍『モンゴル社會經濟史の研究』。

⑳ Г. Сухэбаатар "О Тамгах и имах табуное. Дарригаиг"

㉑ Х. Пэрлээ "Овгийн Тамга бол аливаа улс Үндэстний улсаа, Соёлын холбоог судлах чухал эх сурвалж мөн"

なお、第三回國際モンゴル學者會議後、入手したペルレ氏の Х. Пэрлээ "Монгол Үндэстний Гарлыг Тамгаар Хайж Судлах нь" Улаанбаатар 1975 は、タムガについて最も詳細な研究であり、同書を參照されたい。

㉒ 『新元史』では、探馬赤軍の定義の所ばかりでなく、他の箇處で、探馬赤は謫戍或いは鎭戍と解して『元史』を改めている。例えば、憲宗卽位に反對した失烈門らの處置について、

『元史』憲宗本紀の

謫失烈門也速孛里等於沒脫赤之地。

とあるところを、『新元史』睿宗列傳では、

失烈門與定宗二子忽察腦忽亦以謀作亂、訊鞫得實、謫失烈門爲探馬赤。

と書き改めているが、もし私の說が正しいとすれば、たとえ謀反をはかったにせよ、太宗の愛孫失烈門が、ある領主の所有印をおされた隷屬民にさせられたことになり、モンゴル社會史上重大な問題になろう。

㉓ 護氏の研究は、遊牧民族・遊牧社會に對する理解において、また『元史』に對する基本的態度において、私も贊成で、敎えられる所が多かった。ただ護氏は兩論文において、「探馬赤軍とは投下の重要なる軍隊なり」という前提を設定し、これにもとづいて展開したので、特權階級的な軍隊の面が強調されたが、私の見る限り、探馬赤軍編成當時の原點に歸ると、探馬赤軍は隷屬的性格が強いと考えられる。

On the Tamachi 探馬赤 Army under the Kingdom of Mukhali 木華黎

Jumpei Hagiwara

The Tamachi army was a military force active outside of Mongolia in such places as China and Iran from the time of Chinggis Khan. However, there remain unclear aspects of its actual state of affairs, and thus far many Japanese, Chinese, and European scholars have but established various definitions. For example there are theories that the Tamachi army was an advance force, that it was a defense force, and that it was a tribal force formed among the noble Mongol tribes of the Jalair and the Manggut.

I have analyzed this army by going back to its origins under the rule of the kingdom of Mukhali at which point the Tamachi army appears earliest in the historical documents. Thus, before Chinggis Khan built his state, he carried out a full-fledged war and decimated the Tatar and Kereit peoples; their infant children who survived were allocated as subjegated peoples to the noble Jalair and Manggut tribes. When China was under Mukhali's control, he collected together these subjegated peoples, and the army which he organized with each of the old tribes prior to their dissolution was this Tamachi army; and the *tamuγa* or seal of their lord was stamped on each soldier. They bore the heaviest burdens in their role as advance or defensive forces, but as the Mongol armies proceeded with conquering and subjegating, their duties as landlords increased as well. This will be made clear.